

氏名(本籍)	三 <sup>み</sup> 木 <sup>き</sup> 一 <sup>かず</sup> 彦 <sup>ひこ</sup> (兵庫県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2350号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	近世中・後期における三峰信仰の展開とその地域的基盤		
主査	筑波大学教授	理学博士	石井英也
副査	筑波大学教授	文学博士	小口千明
副査	筑波大学教授	博士(文学)	古家信平
副査	筑波大学教授	博士(文学)	浪川健治

### 論文の内容の要旨

本論文は、武蔵国秩父郡（現、秩父市）に位置する三峰山への信仰の展開を、三峰山ばかりでなく、信仰を受け入れた地域の経済・社会の動向や秩父地域との地域間交流の解明を通して明らかにしようとしたものである。

第I章「序論」は、既存の宗教地理学研究の検討から、信仰圏研究に関してその空間的な構造や形状ばかりに関心が集中してきたことや、村落や都市における信仰のあり方を追究しようとした研究が少ないことなど、当該分野での課題を指摘し、上述のような本研究の目的と、それを実現するための研究の枠組みと資料について述べている。

第II章「三峰山と三峰参詣」は、三峰山の側から三峰信仰の展開を明らかにすべく、その沿革と三峰参詣の様相について検討している。三峰山は、本山派修験に属し、その参詣者数は18世紀中期以降増加するが、相模大山や榛名山などと比べると、相対的に新しく確立された霊山であり、伝統的な勢力範囲を示す震割は狭かった。そのため、三峰山にとっては、そうした組織に頼らずに信仰圏を拡大させる工夫が必要であった。他の霊山では、門前集落に居住する御師が参詣に主導的な役割を果たしてきたが、三峰山には門前集落がなく、参詣者を山上に宿泊させるなど、山上を中心として、いわば集権的機構を通じて信仰の拡大に努めてきたことなどはその一例である。18世紀中期以降、三峰参詣の紀行文なども散見されるようになり、本論文では19世紀における2つの参詣記録を参照しながら、参詣者に対する三峰山側の厚遇ぶりや、三峰信仰と秩父三十四カ所巡礼との関わり、あるいはオオカミを神の使いとする眷属信仰に対して、猪鹿除けや火防・盗賊除けといった多種多様な現世利益的信仰が寄せられていたことなども明らかにしている。

続く第III章から第VI章は、三峰信仰の展開について地域ごとに検討を加えている。そのうち第III章「三峰山の基盤確立と大滝村」は、三峰信仰が秩父地域、とくに三峰山下の大滝村において信仰を集めていった経緯について考察している。大滝村では17世紀中期以降、江戸での木材需要の高まりを背景に江戸商人などが木材切り出しに進出してきた。そうした中で大滝村の住民は、山林の権利を主張するために村として結束する必要性が高まり、村の形成期であったこともあって、その象徴としての機能を三峰山を求めることになった。とくに享保5（1720）年の日光法印入山以降、三峰山と大滝村との結びつきはより強固となり、それを

通して秩父地域における三峰山の基盤が確立する。しかし、三峰山と大滝村の関係は、19世紀以降に三峰信仰が秩父地域を越えて拡大するようになると、緊張や軋轢も生じるようになり、常に蜜月状態にあったわけではなかったことなどを明らかにしている。

第Ⅳ章「秩父地域における諸信仰対象と三峰山」は、三峰信仰が秩父地域へ展開していった様相の解明に焦点をあてている。秩父地域では村の鎮守はもちろん、他地域の信仰対象など、さまざまな信仰対象が併存しており、三峰信仰はその一つにすぎなかった。しかし、三峰山は、役僧や配下修験の檀廻などによって村や家を単位として、その信仰を着実に浸透させていった。さらに秩父郡の東部に位置する大野村（現、ときがわ町）の事例では、18世紀中期以降の三峰信仰の受容と、当時の村の経済的・社会的変容（秩父地域における生産・流通の進展、地域間交流の機会の増大、村の組織の変化）との関連を考察している。

第Ⅴ章「関東平野における三峰信仰」は、関東平野の中でも三峰信仰が盛んであり、末社としての三峰社も稠密に分布していた武蔵国東部（足立郡・埼玉郡・葛飾郡）を事例に、以下のような事実関係を明らかにしている。すなわち、三峰信仰は新田の多いこの地域の村落部において、当時、猪鹿除けという農業に関わる願意から受容された。しかし、江戸を中心として流通と宿場町が発展し、地域間交流が活発になるにつれて、三峰信仰もその願意を徐々に火防・盗賊除けに変化させつつ広まっていった。この時代には代参講も一般化するが、とくに三峰講における代参講は、地縁組織と不即不離の関係にあり、構成員間の平等という点で氏子組織や檀家組織といった既存の信仰集団とは異なる性格をもっていた。三峰信仰は、村落部・都市部の双方で受容される性格をあわせもっていたという。

第Ⅵ章「江戸における浸透とその社会的背景」は、江戸における三峰信仰の展開を、その社会的背景とともに考察している。三峰信仰は、18世紀後期以降、檀廻や三峰講の結成によって、火防・盗賊除けの神として江戸の人々の間に定着した。経済力のある江戸の講は奉納額も大きく、三峰山の大きな財政基盤となった。江戸の三峰講のうち、特筆すべきは問屋仲間などによる同業者講の結成であった。なかでも有力であった堅川講の主力を占めた材木問屋は、木材流通で秩父地域と取引関係をもっていた。19世紀に入る頃から既成の流通経路のほころびが目立ってくるが、著者は、三峰山への参詣・奉納などが問屋仲間の結束を保つための措置として機能していたのではないかと推断している。また、火防の信仰に関しては、本来、復興景気で潤う材木問屋が、決して火事を期待しているわけではないと示すための「免罪符」としての効果があつたのではないかと想定している。

第Ⅶ章「結論」は、これまで各章で述べてきた事実を総括するとともに、本研究で得られた成果を整理し、残された課題についてふれている。

本研究の論点は多岐にわたるが、著者は得られた知見を以下の3点にまとめて提示している。その一つは、信仰圏研究に対する寄与である。信仰圏の空間構造は非常に複雑な態をなすが、そのありようを把握するためには、地域の側から信仰をとらえ、経済的・社会的背景と照らし合わせながら検討することによって、はじめて理解できるものと主張している。二点目は、三峰信仰の展開期となった江戸時代のもつ意味である。18・19世紀に数々の代参講が結成されるが、それは、多様な要因によって村や町の秩序が揺れ動く中で、既存の鎮守や檀那寺では満たされない欠落した部分、すなわち講金さえ納めれば構成員は平等であるという性格をもっていたからとする。最後が、信仰展開の基盤としての江戸地廻り経済圏との関連である。経済の発展に伴う地域間交流の拡大は、三峰信仰の基盤確立や展開に寄与したが、それはさらに、信仰をも含む形で、「江戸地廻り」という一つの範囲を徐々に画定する側面をもっていたことを指摘している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

宗教施設は現在の景観においてさえ重要な構成要素であり、また、宗教にまつわる現象が現在の地域を理

解する鍵になりうるにもかかわらず、地理学における宗教に関わる研究は、歴史学や民俗学に比して、成果に恵まれているとは言い難い。地理学における宗教研究のほとんどは宗教集落の形成や信仰圏を扱ったものであるが、前者の研究はともかく、比較的研究蓄積がみられる信仰圏研究などをみても、空間的な構造や形状ばかりに関心が集中し、信仰圏形成の実態や理由については満足できる説明が実に少なかったように思われる。本研究は、停滞している宗教地理学研究に風穴をあけようとする意欲的作品と評価することができる。

本論文は、三峰山には門前集落が発達していない疑問から出発し、信仰の展開を三峰山の教線拡大の工夫・三峰信仰の受容とその地域の動向・秩父と受容地域との地域間関係から検討し、その展開の過程と特色を明らかにした。しかも、その考察に際しては、18・19世紀の江戸や関東という時代性と地域性の中で相対化を図りつつ、幅広い視野から検討していることがもう一つの特徴である。地縁社会の変成と、一方では経済の発達によって揺れ動く社会の中で、代参講など、新しい信仰形態が重要性を持ち始め、信仰を含む形で「江戸地廻り」経済圏が確立することなどを指摘しえたのは、その結果である。信仰は地域や社会の紐帯としての機能を有しており、宗教を地理学的に考察するには、時代性を踏まえた地域的基盤への着目は不可欠であると考えられる。

本論文は、以上のように新地平を拓こうとする意欲的な力作であるが、克服すべき課題がないわけではない。三峰信仰は、各村や家にとって複数の信仰の内の一つとして受容される様が描かれているが、日本人にとって宗教とは何か、という問題を回避したため、民間宗教が興隆した江戸時代中・後期におけるそれらの受容の実態に今一つ曖昧さが残る点や、江戸地廻り経済圏を既定のものとして扱い、その部分に関する実証的検討が欠けていることなどである。

このような課題が残されているが、本論文は、宗教地理学、とくに信仰圏の形成と、各村や町における信仰の受容に対して、新しい研究の枠組みを提示し、堅実な実証研究を通して、宗教地理学のあるべき姿を明快に提示することに成功している。この研究はそれゆえ、地理学における宗教研究のレベルを大きく前進させたばかりでなく、学界に寄与する成果と評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。